

大学運動部における動機づけ雰囲気と部員特性を基軸とした オーバーコミットメント抑制要因の検討

中須賀 巧*

田中 輝海**

抄 録

本研究の目的は、コーチ（部員間）の指導や評価を構造化したチームの動機づけ雰囲気と個の目標に着目した部員特性（個人・社会志向性と競技者アイデンティティ）がオーバーコミットメントに与える影響について検討することである。目的を遂行するにあたり、動機づけ雰囲気が個人・社会志向性と競技者アイデンティティに影響を与え、それら個人・社会志向性と競技者アイデンティティがオーバーコミットメントに影響を与えるという分析モデルを設定した。運動部に所属する大学生 801 名（平均年齢 19.52±1.00 歳）を対象に質問紙調査（運動部の動機づけ雰囲気測定尺度、スポーツにおける個人・社会志向性尺度、競技者アイデンティティ評価尺度、オーバーコミットメント尺度）を実施した。モデルの妥当性検証に共分散構造分析を用いた。分析の結果、モデルの適合度指標は、すべての指標において適合が良いと判断されたことから、モデルの妥当性が認められた。本研究の結果は以下に示す通りである。①競争がオーバーコミットメントに正の影響を示した。②コーチの練習支援、協調、承認、競争が社会志向性を媒介し、その社会志向性がオーバーコミットメントに正の影響を示した。③コーチの練習支援、承認、競争は競技者アイデンティティを媒介し、その競技者アイデンティティがオーバーコミットメントに正の影響を示した。

キーワード：動機づけ雰囲気，大学運動部活動，目標志向性，競技者アイデンティティ，共分散構造分析

* 兵庫教育大学 〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

** 高千穂大学 〒168-8508 東京都杉並区大宮 2-19-1

Examining the Overcommitment Control Factor Based on Relationships between the Motivational Climates and Athletic Personality in University Athletic Clubs

Takumi Nakasuga *

Terumi Tanaka**

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationships among perceived motivational climates, individual and social orientations, athletic identity, and overcommitment to university athletic clubs. We set basic study model that the presence of motivational climates would promote individual and social orientations, athletic identity, which in turn would increase overcommitment to university athletic club. The participants were 801 university athletes and they completed questionnaire (including questionnaire about motivational climate in university athletic club, sports individual and social orientation scale, athletic identity measurement scale, overcommitment scale) . The validity of this model was verified using structural equation modeling. The model was demonstrated to be valid. Furthermore, the results of this study suggested the following processes: (1) The competition had a positive influence on overcommitment. (2) The coach's promotion of task orientation, cooperation, recognition, and competition had a positive influence on social orientation, which in turn had a positive influence on overcommitment. (3) The coach's promotion of task orientation, cooperation, recognition, and competition had a positive influence on athletic identity, which in turn had a positive influence on overcommitment.

Key Words : motivational climates, university athletic clubs, goal orientations, athletic identity, structural equation modeling

* Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494

** Takachiho University, 2-19-1 Oumiya, Suginami-ku, Tokyo 168-8508

1. はじめに

スポーツ・コミットメントはスポーツ参加・継続への決意を意味し、将来のスポーツ活動を促す根幹にある。しかし、それは時にスポーツ活動の抑制やバーンアウト傾向を強めるオーバーコミットメントになる。オーバーコミットメントは、ストレスフルな状況や場であっても、物事に過度に傾注する個人の態度や行動パターンを指し、危険な状態として位置づけられている (Joksimovic et al., 1999)。つまり運動部活動におけるオーバーコミットメントとは、周囲の期待に応えることのみを優先し、自らの願望や欲求を抑制して活動に打ち込む部活動への過剰な適応状態のことを意味している。

運動部活動への参加者は、純粋に勝利のため、強く(うまく)なるためといった自己あるいはチームのために参加している者もいれば、チームが掲げる目標と自己の目標が一致し参加している者、指導者(監督やコーチ)、親、チームメイトといった他者の期待に応えるために参加している者、大学への入試形態(スポーツ推薦など)や卒業後の進路のために参加している者など、その理由は様々である。そこでは、自己の求める理想や目標が所属する運動部活動の方針や周囲を取り巻く仲間の考え方が異なった場合でも、その部や活動内容に対して不安や苛立ちを喚起させながら活動を続けなければならないストレスフルな状況も存在し、運動部活動への過剰な取り組みによってオーバーコミットメントに陥る可能性も十分ある。つまり、部員が部活動に参加している現状をどう考えているか、所属する部がどのような目標をもって練習・試合に臨もうとしているか、それによってオーバーコミットメントに与える影響も異なることが考えられる。しかし、これまでに運動部活動へのオーバーコミットメント形成要因について検討している研究は僅少であり、オーバーコミットメントの予防的立場から見ても検討の余地は十分にあると言える。

本研究では、オーバーコミットメント予測要因を探索的に検討するために以下の概念に着目する。1つ目は、運動部における動機づけ雰囲気である。これは重要な他者(監督、コーチ、マネージャー、チームメイトなど)によってつくられる雰囲気と定義されており(西田・小縣, 2008)、成績雰囲気(他者との比較を通しての達成を重視する雰囲気)と熟達雰囲気(学習や熟達のプロセスを重視する雰囲気)の2つの側面から周囲が有する目標の違いを構造的に捉えて検討することができる(Ames and Archer, 1988)。このような

運動部の雰囲気を構造化することによって、どのような雰囲気がオーバーコミットメントと関連しているのかについて検討することが可能である。

2つ目は、部員個々が持つ志向(選手としての考え方)として個人・社会志向性と競技者アイデンティティに着目する。個人・社会志向性(磯貝ほか, 2000)とは、自己の目標達成や個性発揮を重視する個人志向性と、集団での役割遂行や人間関係の維持を求める社会志向性といった異なる志向によって構成されている。また競技者アイデンティティは、自分とはどういう競技者なのか、どういう競技者になりたいかなどの主観的意識や感覚、およびスポーツ経験を通じて得た自己認識やスポーツに関与することで自分を認識していく心理的姿勢(中込, 1993)と定義されている。これらの部員個々が有する考え方がどのようにオーバーコミットメントと関連しているのかについては、これまでに検討されていない。

以上のことから、大学運動部の動機づけ雰囲気と部員特性(個人・社会志向性と競技者アイデンティティ)からオーバーコミットメントの予測因の解明を進めた。

2. 目的

本研究では、コーチ(部員間)の指導や評価を構造化したチームの動機づけ雰囲気と個の目標に着目した部員特性(個人・社会志向性と競技者アイデンティティ)がオーバーコミットメントに与える影響について検討することを目的とした。

3. 方法

3. 1. 調査時期と調査対象

運動部に所属する大学生を対象に、2017年6月上旬から10月上旬にかけて調査を実施し、調査回答に欠損のない801名(男子376名、女子425名、平均年齢 19.52 ± 1.00 歳)を以降の分析に用いた。

3. 2. 調査方法

3. 2. 1. 基本属性

性別、年齢、所属運動部、チーム内の役割(レギュラー、準レギュラー、非レギュラー)、競技経験年数について問う項目を調査票の表紙に記した。

3. 2. 2. 運動部活動における動機づけ雰囲気の測定

運動部の動機づけ雰囲気測定尺度(伊藤, 2001; 森年・伊藤, 2010)を用いた。この尺度は、所属する運動部活動の雰囲気を部員がどのように認知しているの

かを、熟達雰囲気「コーチの練習支援」、協調、「承認」の3下位尺度と成績雰囲気「コーチの能力志向」、「競争」の2下位尺度、それぞれ4項目の合計20項目から測定する。回答は、「全く当てはまらない(1点)」から「とても当てはまる(6点)」の6段階で評定するよう求めた。

3. 2. 3. 個人・社会志向性の測定

スポーツにおける個人・社会志向性尺度(磯貝ほか, 2000)を用いた。この尺度は、部員個人の志向性を、信念や主張を貫くといった個性を活かすことを大切に「個人志向性」と周囲との関係性を良好に保つことを大切にする「社会志向性」の2つの側面から測ることができる。「個人志向性」は8項目、「社会志向性」は10項目の合計18項目で構成されている。回答は「全然そう思わない(1点)」から「とてもそう思う(5点)」の5段階で評定するよう求めた。

3. 2. 4. 競技者アイデンティティの測定

競技者アイデンティティ尺度(磯貝ほか, 2001; 萩原・磯貝, 2013)を用いた。この尺度は、全7項目で構成されており、競技者のアイデンティティの程度を容易に、かつ正確に評価できる。回答は、「全く違う(1点)」から「全くその通り(7点)」の7段階で評定するよう求めた。

3. 2. 5. オーバーコミットメント傾向の測定

オーバーコミットメント測定尺度(松井, 2015)を用いた。この尺度は、運動部活動における過剰な取り組みを意味するオーバーコミットメント傾向を6項目で測ることができる。回答は、「全く当てはまらない(1点)」から「とても当てはまる(5点)」の5段階で評定するよう求めた。

3. 3. 分析モデルの設定

大学運動部における動機づけ雰囲気や個人・社会志向性は運動部への適応感と関係していること(中須賀ほか, 印刷中)、競技者アイデンティティがスポーツ参加・継続に関連すること(Chen et al., 2010)などの報告を参考にしながら、本研究では独自の分析モデル(図1)を新たに設定した。まず重要な他者(コーチや部員)がつくる環境の構造(雰囲気)である動機づけ雰囲気は、部員を取り巻く環境認知の変数として扱われている。また目標志向性や競技者アイデンティティは個の目標に着目した部員特性であり、オーバーコミットメントの変動を説明する変数と言える。以上の点を踏まえ、本研究では、動機づけ雰囲気を独立変数、部員特性(個人・社会志向性、競技者アイデンティティ)を媒介変数、オーバーコミットメントを従属変数

となるように位置づけた。このモデルにより、オーバーコミットメント抑制要因をチームの雰囲気と部員特性の双方から検討することが可能である。

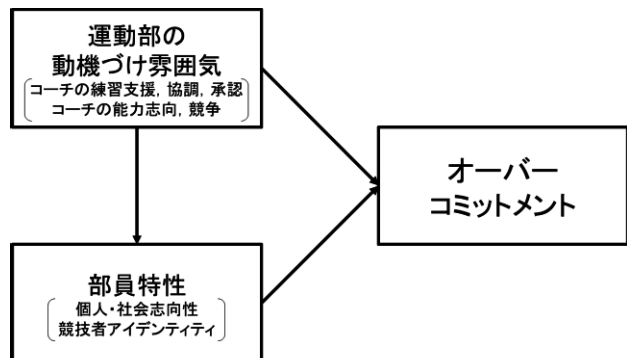


図1 分析モデル

3. 4. 調査手続きと倫理的配慮

調査は、調査の趣旨および測定内容をコーチに説明し、その後、調査協力の許可が得られた運動部に対して行われた。倫理的配慮の説明は、調査内容が強制的ではなく途中で辞退できること、中断しても不利益が被ることは一切ないこと、個人情報特定されないID番号に変換されることを調査票の表紙に記すとともに、研究代表者もしくは研究協力者が調査協力依頼書をもとに口頭でも行われた。調査票への不備のない回答をもって同意所得と見なした。なお調査は、バレーボール部、ラクロス部、野球部、サッカー部、バスケットボール部、陸上部、水泳部、柔道部、剣道部など様々な運動部活動で実施し、特定の運動種目の特徴がデータに反映されないように実施した。

3. 5. 統計解析

基本統計量として、各尺度の平均値、標準偏差、相関係数を算出した。図1の分析モデルの検討は、共分散構造分析により行い、算出されるモデル妥当性の判断基準となる適合度指標とそれらの基準値は、先行研究(豊田ほか, 1992; 室橋, 2003)に倣い、GFI(0.90以上)、CFI(0.90以上)、RMSEA(0.08以下)とした。有意水準5%のもと、分析にはIBM SPSS Amos22.0を使用した。

4. 結果及び考察

4. 1. 各尺度の基本統計量

モデル解析に先だって、各下位尺度の基本統計量(平均値、標準偏差、相関係数)を算出した(表1)。各下位尺度間の有意性が認められた相関係数について、動

機づけ雰囲気と部員特性の関係を述べると、コーチの練習支援、協調、承認、競争は、社会志向性（順に $r=.33$ 、 $.35$ 、 $.52$ 、 $.39$ ）と競技者アイデンティティ（順に $r=.27$ 、 $.18$ 、 $.31$ 、 $.39$ ）に正の関係を示した。またコーチの能力志向は社会志向性と負の関係（ $r=-.11$ ）を示した。コーチの練習支援、承認、競争は個人志向性と正の関係（順に $r=.16$ 、 $.23$ 、 $.18$ ）を示した。続いて、動機づけ雰囲気とオーバーコミットメントの関係を述べると、コーチの練習支援、協調、承認、競争がオーバーコミットメントと正の関係（順に $r=.20$ 、 $.12$ 、 $.20$ 、 $.32$ ）を示した。部員特性とオーバーコミットメントの関係については、社会志向性、個人志向性、競技者アイデンティティがオーバーコミットメントと正の関係（順に $r=.34$ 、 $.26$ 、 $.54$ ）を示した。

4. 2. 分析モデルの解析（運動部の動機づけ雰囲気、部員特性、オーバーコミットメントの関係）

共分散構造分析を行った結果、モデルの妥当性を判断する適合度指標は、GFI=.996、CFI=.999、RMSEA=.015 であり、基準を満たす十分な値であった。図2のモデル内には有意性が認められたパス係数を示している。まず、動機づけ雰囲気からオーバーコミットメントへの直接的な関連を示したパス係数について述べると、競争がオーバーコミットメントに正の影響（ $\beta=.11$ ）を示した。これは、運動部活動において競争が強調されている雰囲気であると部員が強く認知した場合、オーバーコミットメントも高まる傾向があることを示唆している。

続いて、部員特性を媒介する間接的な関連を示したパス係数について述べる。まず、コーチの練習支援、協調、承認、競争は社会志向性に正の影響（順に $\beta=.10$ 、 $.12$ 、 $.38$ 、 $.08$ ）を示し、その社会志向性はオーバーコミットメント（ $\beta=.08$ ）に正の影響を示した。続いて、個人志向性にはコーチの練習支援（ $\beta=.10$ ）と承認（ $\beta=.24$ ）が正の影響を示し、協調（ $\beta=-.10$ ）が負の影響を示したが、その個人志向性からオーバーコミットメントへの影響は認められなかった。最後に、コーチの練習支援、承認、競争は競技者アイデンティティに正の影響（順に $\beta=.10$ 、 $.12$ 、 $.26$ ）を示し、競技者アイデンティティはオーバーコミットメント（ $\beta=.46$ ）に正の影響を示した。なお、変数間の説明力を示す決定係数（以下 R^2 とする）は、社会志向性は $R^2=.30$ 、個人志向性は $R^2=.07$ 、競技者アイデンティティは $R^2=.16$ 、オーバーコミットメントは $R^2=.31$ であった。

これらを整理すると、オーバーコミットメントを高める可能性がある部員特性として、社会志向性と競技者アイデンティティが挙げられる。これらの部員特性はコーチの練習支援、協調、承認、競争といった運動部活動の雰囲気を認知していることによって高まる傾向があることを示唆している。

5. まとめ

本研究では、運動部における動機づけ雰囲気（独立変数）とオーバーコミットメント（従属変数）との直接的な関係に加え、部員特性（媒介変数）を介した間

表1 各尺度の基本統計量(平均値, 標準偏差, 相関係数)

	平均値	標準偏差	相関係数									
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
① コーチの練習支援	16.59	4.18	—									
② 協調	17.86	3.76	.29 *	—								
③ 承認	18.59	3.44	.43 *	.48 *	—							
④ コーチの能力志向	12.90	3.86	.04	-.30 *	-.14 *	—						
⑤ 競争	17.47	3.47	.47 *	.41 *	.54 *	.09 *	—					
⑥ 社会志向性	20.72	3.04	.33 *	.35 *	.52 *	-.11 *	.39 *	—				
⑦ 個人志向性	18.51	3.21	.16 *	.04	.23 *	.03	.18 *	.40 *	—			
⑧ 競技者アイデンティティ	37.85	6.99	.27 *	.18 *	.31 *	.00	.39 *	.45 *	.39 *	—		
⑨ オーバーコミットメント	20.01	4.95	.20 *	.12 *	.20 *	.02	.32 *	.34 *	.26 *	.54 *	—	

* $p<.05$

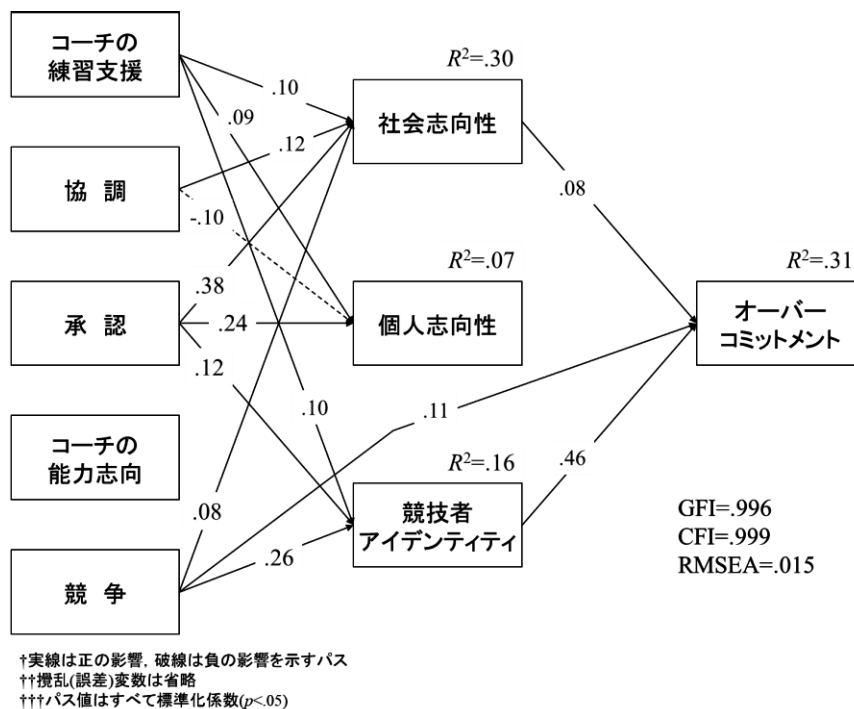


図2 運動部の動機づけ雰囲気, 部員特性, オーバーコミットメントの関係

接的な関係についても検討できるモデルを設定し、分散構造分析による変数間のパス係数および独立変数・媒介変数から従属変数への R^2 値の検証を行った。分析の結果、モデル採択の基準となる各適合度指標は、基準を満たす良好な値であり、設定したモデルは妥当なものであった。またオーバーコミットメント（従属変数）に対する説明率は31%を示しており、本モデルは動機づけ雰囲気および部員特性がオーバーコミットメントに関連することを説明する有力なモデルの1つとして位置づけることができると言えるだろう。モデル内のパス係数からは、運動部活動において競争を強調する雰囲気や競技者アイデンティティがオーバーコミットメントの直接的な促進要因になることが示唆された。

なお、今後の課題として以下のようなことが考えられる。1点目として、男性と女性を含めてモデル解析を実施したが、今後は性差に着目した特徴について検証していくことも求められるだろう。2点目として、モデル解析とは異なる視点によってデータ解析を実施していくことも必要になるだろう。例えば、オーバーコミットメント得点をベースに群分けを行い、動機づけ雰囲気の認知や志向性・アイデンティティの特徴を把握できるのではないかと考える。これらを今後の課題とし、よりよい運動部活動の在り方について継続的に検討していくことが必要になるだろう。

【参考文献】

- Ames, C. and Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267.
- Chen, S., Snyder, S., and Magner, M., (2010) The effects of sport participation on student —athletes' and non-athlete students' social life and identity. *Journal of Issues in Intercollegiate Athletics*, 3, 176-193.
- 萩原悟一・磯貝浩久 (2013) 競技者アイデンティティに関する研究—日本語版尺度の再検討および競技レベル、高校生・大学生競技者の比較—. *運動とスポーツの科学*, 19(1).
- 磯貝浩久・徳永幹雄・橋本公雄 (2000) スポーツにおける個人・社会志向性尺度の作成. *スポーツ心理学研究*, 27(2), 22-31.
- 磯貝浩久・Brewer, B. W.・Cornelius, A. E.・Etnier, J.・徳永幹雄 (2001) 競技者アイデンティティに関する研究—評価尺度の作成と性、文化、競技レベル、動機づけとの関係—. 財団法人ミズノスポーツ振興会 2001年度研究助成金研究成果報告書.
- 伊藤豊彦 (1996) スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討. *体育学研究*, 41(4), 261-272.
- 伊藤豊彦 (2001) 高校生における運動部の動機づけ構造

の認知に関する研究. 運動心理学の展開. 遊戯社,
pp.148-162.

Joksimovic, L., Siegrist, J., Meyer-Hammer, M., Peter,
R., Frank, B., Klimek, W. J., Heintzen, M. P., and
Strauer, B. E. (1990) Overcommitment predicts
restenosis after coronary angioplasty in cardiac
patients. *International Journal of Behavioral
Medicine*, 6(4), 356-369.

松井幸太 (2015) 高校運動部活動における生徒の動機づ
けとオーバーコミットメント—生徒の認知する指導
者像からの検討—. *応用教育心理学研究*, 31(2),
39-50.

森年雅子・伊藤豊彦 (2010) スポーツにおける目標志向
性とチームの動機づけ構造がセルフ・ハンディキャ
ッピングに及ぼす影響. *島根大学教育学部紀要 (教
育科学)*, 44, 49-57.

室橋弘人 (2003) 分析のよさを評価する—適合度指標概
論—. 豊田秀樹編, *共分散構造分析 疑問編*. 朝倉
書店, pp.122-125.

中込四郎 (1993) 危機と人格形成—スポーツ競技者の同
一性形成—. 道和書院.

中須賀巧・阪田俊輔・田中輝海 (印刷中) 大学運動部の
動機づけ雰囲気, 個人・社会志向性, 部活動適応感
の関係. *スポーツ産業学研究*.

西田保・小縣真二 (2008) スポーツにおける達成目標理
論の展望. *総合保健体育科学*, 31, 5-12.

豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統
計学 共分散構造分析入門. 講談社, pp.174-177.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したも
のです。

